



うちだ・のぶこ ●1946年群馬県生まれ。十文字学園女子大学理事・特任教授。お茶の水女子大学名誉教授。専門は発達心理学、認知心理学、心理学言語学、保育学。2008年より法務省裁判員制度有識者会議委員。著書に『0歳から伸びるエデュケーションの誘い』など、編著『高な保育のための心理学講座』など多数。

最も大切なのは ”子どもの安全基地”になること

周り比べて焦る必要はありません

早期教育流行りの昨今、「早く何かを習わせなきゃ！」と、焦るお母さんは多いのではないだろうか。本誌連載中の「初めてママの安心子育て」では、早期教育に警鐘を鳴らしている。筆者である十文字学園女子大学理事・特任教授の内田伸子さんにご登場いただいた。

「近所に、難関の国立大学付属小学校に入ったお子さんがいたのですが、いつも冴えない顔をしています。中学は公立に進んだようですが、打って変わって楽しそうになったのです。小学生の時は、さ

ぞ勉強が大変だったのでしょう」

今の子どもたちは大変だ。塾や通信教育、そして複数の習い事をするのが当たり前で、時間の余裕がない。昨年11月1日の朝日新聞には、「名門中学に通う知り合いの女の子の睡眠時間は3、4時間。それぐらい勉強しないとついていけないというが、心身の成長が心配だ」という投稿が載った。このように、学力競争はますます過熱している。

「少子化で、わが子を大事に育てたいと思う一方、周りの人が塾や習い事に通わせていると、『乗り遅れたら大変!』と焦ってしまうのわかります。

しかし、さまざまな調査からはつきりしているのですが、子どもに早くから読み書きを覚えさせても、

小学校で差は消えるのです。子ども時代は、詰めこみ教育より、豊かな想像力を育むことのほうがずっと大切です」

人としての基礎固めに重点を

想像力は、生後10か月頃から生まれるという。この時期を「第1次認知革命」というのだと、内田さんが教えてくれた。

「『まんま』な」と発語できるようになる頃ですが、この時期、快・不快を感知する脳の扁桃体と知識や体験を蓄積する海馬とのネットワークが発達し、自分の体験の記憶を、イメージとして頭の中で再現できるようになります。その後、5歳後半に脳のワー

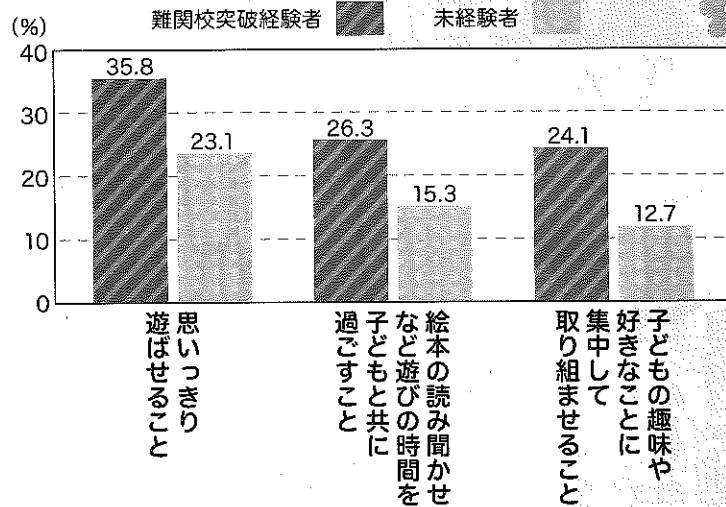


キングメモリが発達する『第2次認知革命』が起こり、プランや自分自身のことを振り返る「メタ認知」が働きはじめます。すると、この後どうなるかを予測したり、遊びがプラン通りに進まないとき遊び方を変えたりと、自分の行動をコントロールできるようになります。このぐらいの年になると、お砂場での「ごっこ遊び」も、役割をきちんとこなすなど遊び



難関校突破組は、子ども時代によく遊んでいた!

親御さんを対象に、「小学校就学前にとても意識的に取り組んでいたこと」を聞きました。難関校突破組は「思いっきり遊び」、「絵本の読み聞かせなど親子で時間を共有」したり、「好きなことに集中的に取り組む」ことをしていました。



●資料/内田伸子

内田先生が教えてくれた

子どもが伸びるしつけ

- 子どもに寄り添って“子どもの安全基地”になる。信頼関係の礎を作る
- 周りの子と比べるのではなく、「その子自身の進歩」を認めて褒める
- 親や大人が、生き字引のように余すところなく定義を与えない
- 裁判官のように“判決”を下さない。禁止や命令ではなく「提案」を
- 子ども自身が考え、判断する余地を残す。「自律的思考力」と「創造的想像力」を育む

がぐつとまとまります。

そして9〜10歳ぐらいになり、「第3次認知革命」によって脳の前頭連合野が発達すると、意思力や判断力、モラル、情緒などが育まれ、人としての豊かさが増します」

10歳ぐらいまでは、人としての基礎作りをしつかりすべき。そんな大切な時期に、子どもを勉強一辺倒にさせていいわけがない。「うちの子、テストの点が10点も上がった」と、見えるもの。にばかり目を向けてはいけけない、と内田さん。

「子どもは一人ひとり違います。発達のスピードだって、同じではありません。ですから、「お友達は〇〇できるのに、どうしてうちの子はできないのかしら?」と悩む必要などありません。

また、「昨日はできたのに、どうして今日はできないの?」と、発達が後戻りしているように見える時があると思います。しかし停滞ではなく、心と体の次なる成長のために、「見えない力」を溜めこんでいる時期なのです。このように、子どもは行きつ戻りつしながら発達し、人としての基盤がしっかりと作られていきます。この段階を軽んじて勉強にだけ追いたてては、人間がヤワになってしまいます」

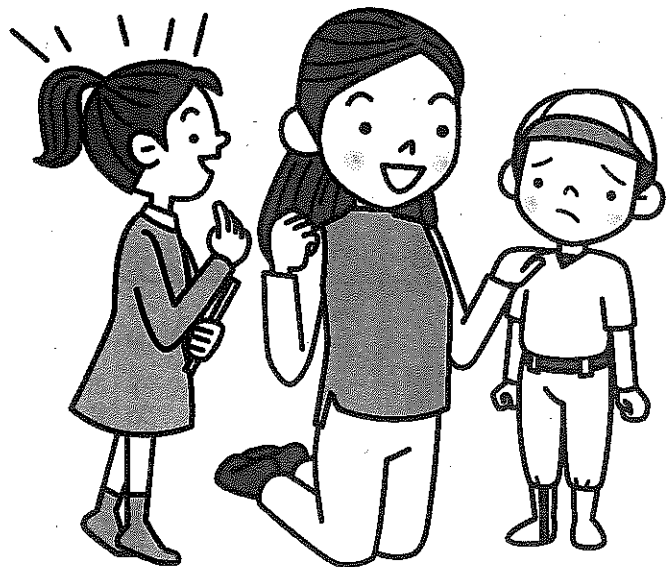
「待ちの子育て」と「3日の言葉かけ」

今のお母さんは学歴の高い人も多く、5歳の子が「どうしてお風呂の中だと手が軽くなるの?」と聞いてきた時、「それは、浮力がはたらくからよ」と答える人もいるという。浮力と言われても、5歳ではわからない。

「先ほど認知革命のお話をしましたが、ものを覚える際、扁桃体が快適な状態だと海馬が活性化してどんどん記憶することが出来ます。しかし、勉強を強制されたり、叱られながら勉強している場合、扁桃体は不快で満ちていますので海馬に知識が蓄積されません。つまり、『知りたい』『面白い』という気持ちがないと、勉強にならないのです」

内田さんは、子どもには生活や遊びを通してさまざまな経験をさせることが大切だという。キャンプに行ったり、一緒に料理をしたり、美術館や博物館へ出かけるなど、親子で触れあおう。

「早期教育の問題点は、子どもから考える時間を奪うことです。先ほどのお風呂での質問には、「どうしてだと思っ?」と、逆に子どもに聞き返してあげ



ましよう。そうすることによって、考える力がついていきます。

親がすべきことは、子どもに寄り添い、かわいがり、子どもの「安全基地」になること。それから

『3つのHの言葉』を心がけましよう。何かできたら『ほめる』、できない場合には『はげます』、そして子どもの視野を『ひろげる』言葉をかけるのです。ここでナンかけです(笑)。子育てとかけ、『盆栽』と解きます。その心は——『松と菊』。つまり、子どもの成長をゆっくりと『待ち』、子どもの声を耳を澄ませてしっかりと『聴き』、『聞き』ではなく『傾聴する』(気持ちで)ましよう。子どもが進歩した時には、3日の言葉(ほめる・はげます・〈視野を〉ひろげる)をかけてあげてください。

『うちの子はもう10代だし……』という親御さんがいるかと思いますが、今からでも大丈夫。今日から接し方を変えればいいのです。すると、子どもはガラリと変わりますよ。子育てに、『もう遅い』はないのです。

*

子育ては、気負わなくても大丈夫——。4人の皆さんのお話で、心がだいぶ軽くなったのではないだろうか。「自分の長所も短所も、親に丸ごと受け止められている」と感じていけば、子どもは、自分の芽をすくすくと伸ばしていく。家族皆で子どもを慈しみ、大切な一日一日を刻んでいこう。